

アフターケア通信

ご本尊を受けとられた貴方へ

せつぶん
節分

【2月号】



【豆まき】



節分は季節の始まりの日の前日、季節を分けることを意味します。季節の変わり目には鬼（邪気）が生じると考えられており、それを追い払う行事が古くから行われてきました。その代表的なものが豆まきです。

「魔目（豆）」を鬼の目に投げつけ鬼を追い払うための「魔滅」などと言われ、邪気を追い払い、無病息災を願うものです。「鬼は外、福は内」これを当たり前に思っている我々に疑問を感じないでしょうか？

【「鬼は外、福は内」】

私たちは都合がよいものを内に招き、悪いものは外に追い払いたいと思うのです。では私たちにおいて都合の悪いものとは何でしょうか。

「無病息災」病気にならないよう、災難に遭わないよう、いくら注意していても人間のちからでは最終的にはどうにもできないことです。

一方、都合のよいものとは「家内安全」自分の思い通りになること、また楽をしたい、得をしたいということでしょう。幻想の世界を求めるとく、人間の欲は尽きることはありません。

【節分をご縁として】

内にさえ福が来れば鬼はどこへ行っても良いという、自己中心的な思いで、豆まきという慣習を疑いもなく行っているのです。そして、鬼を外に見る自分の心こそが鬼になっているのではないのでしょうか。

このように、どこまでも矛盾をかかえて止まない私たちの在り方を仏は、悲しみ慈しみをもって、明らかにしてくださいませ。

今月の門徒さん

節分、私の勤める園では、子どもたちの元気な声が響きます。鬼は「人」の身を脅かすものという意味があるそうです。

何気なく「鬼は外」と言っていますが、自分の心を覗くと、「あなたの為と言ってやってるのよ」の鬼、「こんなに頑張ってるのに」の鬼、「してやったんだから」の鬼、たくさんの鬼だらけ。

はてさて、昔々の桃太郎はどんな鬼退治をしたのでしょうか。そして、「福は内」の福は一体何でしょうか。



はら とみこ
原 登美子さん

(第3組 教法寺)



真宗大谷派 長崎教区教化委員会



そもそも「赤本」って なぜ赤い色をしているの？



～『教行信証』を命がけで守った“本向坊了願さん”のお話～

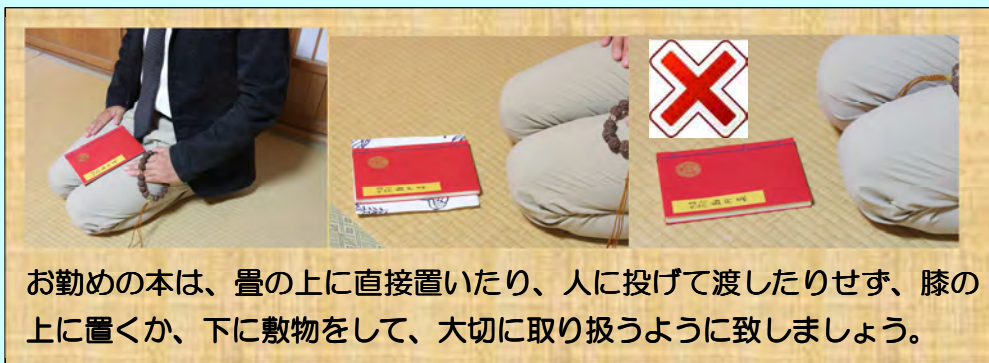
私たち真宗門徒にとって、もっとも馴染み深いお聖教といえは「正信偈」ではないでしょうか。この「正信偈」が書かれた大谷声明集は、真っ赤な表装が為されていることから“赤本”と呼ばれてきましたが、この色は“血染めの赤”といわれているのです。

文明6年（1474年）3月28日、北陸の布教拠点でもあった吉崎御坊が火事になり、本堂や諸堂が焼け落ちました。本願寺第8代の蓮如上人は、何とか火災から逃れることができたが、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』を書院に置いてきたことに気がきます。しかもこの本は親鸞聖人御真筆のもの。真宗門徒にとっては何物にも代え難い大切なものです。皆が茫然と佇む中、一人の弟子が水をかぶって燃えさかる炎の中へ飛び込んでいきました。この方の名を“本向坊了願”と言います。

本向坊が『教行信証』の巻物を発見し懐に納めてから引き返そうとしますが、戻り道がふさがって引き返すことができません。このままでは命もろとも巻物まで燃えてしまうと、意を決した本向坊は懐中より小刀を取り出し、自らの腹を十文字に捌いたのです。その腹中に巻物を深く納め入れ、聖教が燃えるのを身を挺して守られたのです。

焼けた御坊跡には真っ黒に煤けた本向坊の姿がありました。急ぎやってきた蓮如上人に対し、本向坊は自身の腹を指さし息絶えたそうです。本向坊39歳の往生でありました。この本向坊の遺徳を偲び「正信偈」の表装は真っ赤な色をしているのです。

何気なく手にしている「正信偈」ですが、700年の時を経てこれが私たちのところまで伝わってきたということは、そこに様々な出来事とともに、多くの人々の「教えに出遇って欲しい」という願いがあることを忘れてはなりません。



お勤めの本は、畳の上に直接置いたり、人に投げて渡したりせず、膝の上に置くか、下に敷物をして、大切に扱うように致しましょう。